

『源氏物語』論

—『まなざし』の継承と展開—

村山 太郎

(二〇〇四年九月三〇日受理)

【一】はじめて

〈色好み〉中心の〈女〉表象が流通する時代であって、〈色好み〉兼家との往事と向き合い、既存の言説では描ききれない自己像、苦悩する〈女〉の姿を描き出した『蜻蛉日記』。あるいは、〈女〉の存在性が男によって意味づけられ、一元化される中で、男(『色好み』)にとつての〈女〉の他者性へと読み手のまなざしを促す『源氏物語』の言説。これらの言述のありようは、平安期の言説状況(『個と言説とのかかわり方』)をよく伝える。

本稿では、こうした平安期の言説状況を念頭に置きつつ、「一般的に、平安末期物語は、全て源氏物語の模倣作品であると考えられ」¹⁾、『源氏物語』以後、物語文学は下降衰退期に入り、「その実質は時とともに痩せ細り」²⁾、鎌倉時代のいわゆる擬古物語に引き継がれていく」と評される後代「物語文学」について、その〈女〉表象のあり方を考察する。

【二】まなざしの継承

一 紫の上の継承

先述の『蜻蛉日記』や『源氏物語』の開示した問題系の継承は、次にあげる中世王朝物語『風につれなき』において確かめうる。まずここでは、『源氏物語』と、言説との対し方という点で同様の立ち位置にいることを窺わせるテキストの言述のありようから確認していく。

(1) 思しだに立ちぬれば、すがやかにて神無月に定まりぬるを、いつしかと過ぐる日数も心もとなく思し召したる御気色を、藤壺の女御は、もとよりあるべきことを、今までも無かりつること思はずなれと、ことわられ給ふ心は心にて、同じことなれど、人の思ひつることもいまま少したちまさり、おぼえやむごとなからむさまに、移ろはせ給はん御心も恨めしう、まだきよりの嘆かしう思さるるは、おいらかにはあらぬ御心なめり。
〔『風につれなき』一二〇頁〕

本文(1)は、女主人公(中君)の姉(大君)が入内する直前の場面である。もともと大君の父関白には、帝、大宮などから入内要請があつたが、関白は大君の年少を理由に辞退していた。叙上の場面は、大君が盛大な裳着を行った後の出来事、つまり、大君入内を目前に控えた後宮での一齣であるが、注目すべきは、傍線部に示すごとく、先に後宮に入っていた藤壺の女御の苦悩が描き込まれていることである。そこでは、「もとよりあるべきこと」と「ことわられ給ふ」藤壺の心中思惟とともに、帝寵の「移ろはせ給はん御心も恨めしう」、「嘆かしう」思う、「おいらかにはあらぬ御心」をも描き込んでいることが分かる。この度の大君入内を「あるべきこと」と納得しようとする一方で、寵愛の移ろいに苦悩する藤壺の女御の姿。こうした女の姿は、『源氏物語』における女主人公、紫の上に通じるものである。

(2) 「まだきに騒ぎて、あいなきもの恨みしたまふな」と、いとよく教へきこえたまふ。心の中にも、「かく空より出で来にたるやうなることにて、のがれたまひがたきを、憎げにも聞こえなきじ。わが心に憚りたまひ、諫むることに従ひたまふべき、おのがどちの心より起これる懸想にもあらず。堰かるべき方なきものから、をこがましく思ひむすぼほるるさま世人に漏りきこえじ。(…中略…)」など、おいらかなる人の御心といへど、いかでかはかばかりの隈はなからむ。今はさりとものみわが身を思ひあがり、うらなくて過ぐしける世の、人笑へならむことを下には思ひつづけたまへど、いとおいらかにもみもてなしたまへり。(『若菜上』三九頁)

本文(2)は、皇女、女三の宮が光源氏のもとに降嫁することを、光源氏自ら紫の上に伝える件である。波線部に見える夫光源氏の「もの恨みしたまふな」との「教へ」に対して、「のがれたまひがたき」ことで、「憎げにも聞こえなきじ」、「漏りきこえじ」と「心の中」で自らを律していく紫の上の姿が描かれている。「心の中」とあるように、光源氏の「教へ」に対して答えもしない紫の上の姿が看過できない叙述としてあるが、ここで注意したいのは、さらに後の叙述に見える、「下には思ひつづける紫の上の姿である。自らを、「のがれたまひがたき」ことと律しながらも、やはり行く末に不安を抱いてしまう、相反する紫の上の内面が描き込まれていることが確認できる。

こうした『源氏物語』の叙述に、〈色好み〉言説への批評性を窺い、析出した次第であるが、同様のことが、一二七〇年頃までに成立(上限は『無名草子』(一一二〇一年)成立後)したかと目される『風につれなき』の叙述から窺えるのである。

二 対話 性の継承

このことは、用例(1)の後に続く叙述からも言える。

(3) 昨夜も上り給はざりしに、今日も暮るるまで渡らせ給はぬよ、こよなう今から変はりにける御心の浅さもつらくて、空のみながめられ給ひて、移りゆく人の心の秋の色に時雨も待たず濡るる袖かな
爪音やさしく弾きすさみ給ふほどにぞ渡らせ給ひける。一筋に詠め入

りて、忍びやかにおはしますをば聞き給はざりけり。いと端近き御琴の音に御耳止まりて、あやしくあまりもの恨みのすすみたるかなとは思し召さるれど、人のさま、折柄をかしければ、やをら寄せ給ふまに、しぐるとも色は変はらじ呉竹のよよの契りをむすびかさねて懐かしくのたまはする御気配につけても、まだきにだにも変はりぬべきをと聞こえまほしく、恨めしけれど、さすがに直面なれば、心にこめてとけぬさまにうち側み給へるさまも、容貌ある人とはうけざりてぞおはする。萩襲に女郎花の桂など、常のことなれど、着なし給へる色合ひ、袖の香も、なべての人には似ず思し召されて、「夜ざりはかならず」などのたまはせて帰らせ給ふにぞ、慰まれ給ひける。(『風につれなき』一二三頁)

最近では他の女御・更衣方に渡ることが多くなった帝の様子を見るにつけて、「御心の浅さもつらくて、空のみながめ」る藤壺の女御が、「こよなう今から変はりにける」帝の気持の移ろいを恨む内容の和歌を口ずさむ。他方で、それを聞きつけた帝が、過往の仲らいから気持の変わらないことを和歌に託し詠み掛けている。叙上の本文はそのような場面である。帝との遣り取りによつて、「慰まれ給ひける」女御の様子などから、この場面は、男の訪れを待つ女が、待つ我が身の苦悩を独り和歌に詠む一方で、それを聞きつけた男がその姿を「あはれ」に感じ、女を慰める歌を読みかけるといふ体裁である。つまりこのテキストの書き手は、以下に挙げる「歌徳説話」との「対話」を通じ、かかる帝と女御の出来事を語り出しているのである。

(4) 昔、をとこ、女のもとに一夜いきて、又もいかずなりにければ、女の、手洗ふ所に貫簀をうち遣りて、たらひのかげに見えけるを、みづから、我許物思ふ人は又もあらじと思へば水の下にも有りけり
とよむを、来ざりけるをとこ立ちきゝて、
水口に我や見ゆらんかはづさへ水の下にて諸声になく

(5) おなじ女、内裏の曹司にすみける時、忍びてかよひ給ふ人ありけり。頭なりければ殿上につねにありけり。雨のふる夜曹司の蔀のつらにたちよりたまへるもしらで、雨の漏りければ、むしろをひきかへすとて、

おもふ人雨とふりくるものならばわがもる床はかへさざらまし
となむうちいひければ、あはれとききて、ふとはひいりたまひにけり。

（『大和物語』「八十三段」）

待つ〈女〉の苦悩が詠み込まれた和歌に「あはれ」を感じ、それに風流に応じていく〈色好み〉。叙上の「歌徳説話」にかんする話題は、王朝〈雅〉の文化規範、文化装置といえよう。その詳細を見ていくと、用例（4）は、「女のもとに一夜」通った男が、訪れの途絶えに苦悩する女の和歌を聞きつけ、女を慰める歌を詠みかけるといふもの。用例（5）では、女のもとに「忍びてかよひ給ふ」男を独り待つ女が和歌を詠み、男がそれを「あはれ」と聞つけて、女の部屋に「はひい」という内容である。独り待つ〈女〉を慰める男の和歌や、男が「たちよりたまへる」ことを知らず独詠する〈女〉の姿と、用例（3）の傍線部の藤壺の女御との関わりを考えれば、当話題を語る際の書き手の「対話」先が、かかる「歌徳説話」であることは明らかであろう。

問題は、こうした〈色好み〉本位の論理（Ⅱ〈色好み〉言説）を展開する「歌徳説話」と、これに向き合う『風につれなき』の対し方である。用例（3）に示している波線部をみると、藤壺の女御への気持が変わらないことを詠い、「夜さりはかならず」と女御に言いながら、「帰らせ給ふ」帝の姿が描かれていることに気付く。また、当話題の後の叙述にかんしても、女御の予想通り帝の寵愛は入内した大君に移り、帝と幸福な後宮生活を送る藤壺の女御の記述は見えない。つまり、このテキストでは、用例（5）や、著名な「歌徳説話」、「筒井筒」（『伊勢物語』「二十三段」）のごとき「期待の地平」（忍んで男を待つ女に幸福な結末が訪れる）を裏切り、「歌徳説話」の論理（Ⅱ〈色好み〉言説）では幸福になれない〈女〉の生を描いているのである。

さらに、「歌徳説話」に語られる〈女〉に自己同定する藤壺の女御の姿も重要であろう。帝に対し不審を抱きながらも、これから先も気持は変わらないとの和歌を詠みかけられて「慰まれ給ふ」女御の姿は、先述の「歌徳説話」の「期待の地平」を自己同定したものと見えよう。女御と読み手の期待を裏切る『風につれなき』の書き手は、「歌徳説話」（Ⅱ〈色好み〉言説）との「対話」を通じて、その「応答」として、〈色好み〉言説を内面化しながらも、そうした言説では幸福になれない〈女〉の生を描き出し、王朝〈雅〉の規範たる「歌徳説話」の有する権力性（〈色好み〉本位、男性中心の〈女〉表象（Ⅱ〈男〉たちの言説）

を批判的にまなざしているのである。それは、「帚木」巻「雨夜の品定め」などに顕著な『源氏物語』の〈男〉たちの言説との「対話」を継承するものといえる。

三〈男〉とずれる〈女〉たち

〈色好み〉言説では掬い取れない、男にとつての〈女〉の他者性をまなざし、描き込もうとする『風につれなき』の言説。こうした〈女〉の他者性をめぐるテキストの言説のありようという点から後代王朝テキストを眺めたとき、「あやにくな宿命を背負い、運命に翻弄され」る女主人公の内面を執拗に描くことをもって、『源氏物語』の「正な後継者と見なすことができる」と評される『夜の寝覚』にかんして、上の評価とはやや違った事情が見えてくる。

（6）朱雀院には、名残遠くなるままに、宮のいといたく心細げにおぼしめされたまへるを、この程は夜離れなく慰めたてまつるべきものとおぼせば、あなたがちに、繁うものしたまふを、女君もさるべきことよりはりとなおぼし知り、いみじからんことをも、心よりほかに漏らすべくはたものしたまはねば、いとなだらかなり。（『夜の寝覚』「巻五」）

用例は、紆余曲折を経て男主人公と女主人公（Ⅱ寝覚の君）が結ばれた後の場面。夫には、本文中の「朱雀院」に住む女一の宮が降嫁している。すなわち本文中の場面は、「心細げ」な女一の宮もとに夫が「夜離れなく」慰めにいくという、先述の女三の宮降嫁の際の光源氏と紫の上、あるいは『風につれなき』における大君入内話の際の帝と藤壺の女御といった体のものである。しかし、この際の「女君」（Ⅱ寝覚の君）の姿からは、「ことわり」と「いみじからんこと」に対する女君の「心」の深刻な対立といった事態は表面上は窺い得ない。二人妻の間で双方に恨みなきようとりはからう男とその妻をめぐり、このような妻の姿を描き出す書き手の言説は、〈色好み〉本位の言説に取り込まれたものとも解せそうだ。しかしながら、他方で〈女〉の他者なる姿を描こうとする書き手の身振りがこのテキストでは窺える。

『夜の寝覚』では、幾度も女主人公を困難な出来事と出会わせ、追いつめていく叙述が散見される。それを以下に略述すると、①互いに素性を偽った男主人公との関係、それにもなう懐妊、②互いの素性露見のとき、女君を迎え入

れたい男君の申し出に對する寢覺の君の拒絶、③帝の〈色好み〉に對する寢覺の君の拒絶、となる。先掲の用例(6)はこの①②③の後の出来事である。この①②③の叙述に苦惱する女君の姿が見られ、男の思惑に對して單純にそれに従い得ない女主人公の心中思惟が描き込まれる。つまり、物語では、〈色好み〉の論理と女君が常にずれていく結構をとるのである。こうした叙述からは『夜の寢覺』の〈色好み〉言説への不信感や〈女〉の他者性へのまなざしが窺われ、男君と女君の深刻な認識のずれを描き出した『源氏物語』からの問題継承を見ることが出来る。

【三】まなざしの展開、その諸相

一 〈男〉たちのたじろぎ

〈色好み〉言説下の〈女〉、これの他者性をまなざす『源氏物語』の言述。その言説との対し方に参与し、そうした〈女〉表象へと向き合つていく後代「物語文学」の継承性は以上のようなものである。種々の言述の様態のなかで、〈色好み〉言説への批判的仕草や不信感といった側面は顕著にあらわれる。次に俎上にのぼせるのは、かかる物語状況のなかで、他方、〈色好み〉言説では説明不可能な〈女〉の他者性に出会い、たじろぐテキスト、『大鏡』である。

(7) 第一の御女(藤原師輔の女・安子)、村上上の先帝の御時の女御、おほくの女御・みやすどころのなかに、すぐれてめでたくおはしましき。みかどもこの女御殿にはいみじうおぢまうさせたまひ、ありがたきことをも奏せさせ給ふことをば、いなびさせたまふべくもあらざりけり。いはんや、自余の事をば、まうすべきならず。すこし御心さがなく、御ものうらみなどせさせ給ふやうにぞ、よその人はいはれおはしましし。(…中略(帝の訪問を許さない安子のものうらみ、小一条女御への安子のものうらみをめぐる話題)…)これのみにもあらず、かやうなる事どもおほくきこえ侍しかは。おほかたの御心はいとひろく、人の御ためなどにおもひやりおはしまし、あたりく、あるべきほどく、すぐさせ給はず御かへりみあり。かたへの女御たちの御ためもかつはなさけあり、御みやびをかはさせたまふに、こゝろよりほかにあまらせたまひぬるときは、御ものねたみのかたにや、いかゞおぼしめしけん。この小一条の女御

は、いとかく御かたちのめでたくおはすればにや、御ゆるされにすぎたるおりく、いづくより、かゝる事もあるにこそ。のみちは心ばへにもよらぬことにやな。かうやうの事までは、申さじ、いとかたじけなし。(…中略…)みかどよろづのまつりことをばきこえさせあはせてせさせたまひけるに、人のためなげきとあるべき事をばなほさせたまふ、よろこびとなりぬべきことをばそゝのかし申させたまひ、をのづからおほやけきこしめしてあしかりぬべき事など人のまうすをば、御くちよりいださせたまはず。(『大鏡』第三卷「右大臣師輔」)

叙上は、『大鏡』に見える藤原師輔の娘、安子の「ものうらみ」をめぐる叙述である。テキストでは、安子の「すこし御心さがなく、御ものうらみなどせさせ給ふ」側面を「よその人はいはれおはしましし」という聞き伝えとして語り出す。ここでは、小一条の女御に對する安子の「ものうらみ」の具体的な話題が語られ、その後、こうした話題に對する語り手の評価へと叙述が移つていく。注意すべきは、二重傍線部に見える語り手の文言に、安子の「御ものねたみ」の側面に對して、「…にや、いかゞおぼしめしけん」、「…にやな。かうやうの事までは、申さじ」と判断を臆化させ、説明に困つてゐる箇所があることだ。

「おほかたの御心はいとひろく」、「人の御ため」にも、「かたへの女御たちの御ため」にも「なさけ」あり、「御みやび」をかかず安子が「御ものねたみのかた」ではいかように思われたのか。このように判断を保留していく『大鏡』の書き手は、〈男〉たちの「期待の地平」にある「みやび」な〈女〉からは程遠い安子の姿に出会い、戸惑う。が、他方で、波線部の評言のごとく、「みかどよろづのまつり」とをばきこえさせあはせてせさせたまひける「帝の良き相談役」、「人のためなげきとあるべき事をばなほさせたまふ、よろこびとなりぬべきことをばそゝのか」す帝のよき助言者としての安子の姿を語り、話題をおさめていくのである。

二 〈女〉を回収する〈男〉たち—既有言説の援用

ところで、こうした帝の良き助言者、相談役としての〈后〉の姿は、「六国史」などにおいて散見される、あらまほしき〈后〉の姿と重なる。

(8) 太后諱正子、嵯峨太上天皇之長女、与仁明天皇同産也。(…中略…)淳和天皇備礼聘之、納於掖庭、寵敬兼人。天長四年二月立為皇后。八年元早為災。帝深憂之、走幣群神、祈請百端。后勸帝。録囚徒、廢作役。未及終、朝澎雨晦合。帝逾加愛焉云々。(三代実録「三十五陽成」)

これは、嵯峨天皇の皇女、太后正子の具体的な所作について述べた記事である。そこでは、「元早」の際、「群神」に「走幣」し「百端」を「祈請」して、これをおさめようとする「帝」に、「太后正子」が「徒」(刑)にあたるものを再度取り調べ、「作役」を「廢」することを勧めた結果、「未及終、朝」うちに、「澎雨」が「晦合」し、「元早」がおさまったとある。かかる逸話を語り、「帝逾加愛焉云々」と結ぶこの記事は、帝の良き助言者たる正子をあらまほしき「太后」として称揚するものと考えてよいだろう。

また、こうした帝の良き補佐役としての〈后〉の姿を差し出す語り口は、(儒教)言説のもと、后妃の天子に対する内助・諫言をあるべき姿と説く劉向(B. C. 七九〇八)撰『列女伝』にも見える。以下に挙げるのは、そうした后妃「太姜」をめぐる一説である。

(9) 太姜者王季之母、有台氏之女。大王娶以為妃。生太伯・仲雍・王季。太姜有_レ色而貞順。率_レ導諸子、至於成童、靡_レ有_レ過失。大王謀_レ事、必於_レ太姜、遷徙、必与_レ太姜。君子謂、太姜広_レ於德教。(劉向『列女伝』卷一「母儀伝」・「周室三母」)

さらに、(儒教)言説でのあらまほしき〈后〉の姿は、当テキストでは別の話題で「有_レ髮氏之妃_レ湯也、統_レ領九嬪、後宮有_レ序」(劉向『列女伝』卷一「母儀伝」・「湯妃有_レ髮」)と、後宮秩序を統治するものとしても描き出されている。『列女伝』では、こうした〈后〉のありかたを、あらまほしき〈后〉と説き、『詩經』になぞらえていくのであるが、先掲の『三代実録』や『大鏡』における〈后〉語りもこれと無縁ではなからう。つまり『大鏡』では、「みやび」な〈女〉から逸脱する安子の「ものうらみ」の姿にたじろぎながらも、最後には安子を(儒教)言説でのあらまほしき〈后〉として位置づけるのである。

このように先掲の『大鏡』の叙述を見ると、用例(7)の波線部、「この小

一条の女御は、いとかく御かたちのめでたくおはすればにや、御ゆるされにすぎたるおりくのいでくるより、かゝる事もあるにこそ」などと、小一条の女御への過剰なまでの寵愛(後宮秩序の混乱)と安子の逸脱した「ものうらみ」を関係づける叙述は重要であろう。すなわち、『大鏡』の書き手は、他者なる〈女〉の姿に出会い、たじろぎながらも、(儒教)言説に接近することで、(儒教)言説の〈女〉として安子像を再構成し、小一条の女御への安子の「ものうらみ」を後宮秩序の統治者たる振る舞いと理解し、語り収めるのである。かかる『大鏡』の言述は、〈女〉の他者性に出会いながらも、別の言説を参照することでこれを理解していったものと考えられる。

三〈あはれ〉に回収される〈女〉たち—和歌世界と物語

了解不能な〈女〉の他者性に出会い、たじろぎながらも、他言説を参照することで他者なる〈女〉を理解していく『大鏡』の言述。これを換言すれば、〈女〉の他者性を他言説に回収していく言述といえよう。こうした言述のありようは、「はかなげな女の悲恋の物語」と括られ、鎌倉期以降の(源氏)取りのそまつな実態として扱われることが多い『擬古物語』、その一つかと思える『山路の露』にも確認できる。ここでは、『山路の露』を遡上にのぼせ、その言述の様態を考察する。

『山路の露』は、平安末期成立、作者は世尊寺伊行、あるいは建礼門院右京大夫かと目されるテキストで、『源氏物語』『夢浮橋』のその後を語る物語という体裁をとる。これを「はかなげな女の悲恋の物語」の一つと押えるのは、物語の展開中散見される浮舟の様子から。例えば、母君に再会し、所在安否を知らせたいと思ふも、ままならない、「……むすぼ、れてのみ過ぐし給ふ」(四二八頁)浮舟の様子。また、薫が病の後、小君を介し浮舟に便りを送らうとする、その折りの浮舟の、「かしこには、例のまぎるゝかたなく眺め給ふ」(四二九頁)様子などにそれは窺い得よう。以下に挙げる用例も、悩める浮舟の姿が描き出されている場面である。

(10) 妻戸も開きて、いまだ人の起きたるにやと見ゆれば、繁りたる前裁のものとより、つたひ寄りて、軒近き常磐木の、所せくひろごりたる下に、立ち隠れて見給へば、こなたは仏の御前なるべし、名香の香、いと染み深く香り出て、たゞこの端つ方に、行ふ人あるにや。経の巻返さるゝ音も、

しのびやかになつかしく聞こえて、しめくとも哀なるに、なにとなく、やがて御泪すゝむ心地して、つくく^とと見給へるに、とばかりありて、行ひはてぬるにや、「いみじの月の光や」とひとりごちて、簾の端すこし開けつゝ、月の顔をつくく^とと眺めたるかたはら目、昔ながらの面影、ふと覚し出られて、いみじうあはれなるに、見給へば、月は残りなく差し入たるに、鈍色、紺染めなど^にや、袖口なつかしう見えて、額髪、ゆらくと削ぎかけられたる、まみのわたり、いみじうなまめかしようおかしげにて、かゝるしもこそらうたげさまざりて、忍びがたう、まもり給へるに、なをとばかり眺め入て、

さとわかぬ雲の月のかげのみや見し夜の秋にかはらざるらんと、しのびやかにひとりごちて、泪ぐみたる様、いみじうあはれなるに、(…中略…)とさまかうさまにあらまされつるを、逃れがたく、見あらはされ奉りぬると、詮方なくて、泪のみ流れ出つゝ、我にもあらぬ様、いと哀也。(四三四〜四三五頁)

叙上は浮舟の住まう邸に到着した薫がやがて邸内へと入り込む場面である。その語り口を見ると、括弧に示すごとく「にや」、「べし」と語り手が薫の視線を先取りするかのように浮舟の仕草を語り、薫の視点を中心として語り出されている。この語り口は、『源氏物語』「末摘花」における光源氏の垣間見場面の語りと同様、語り手が主人公の視点と同一化しながら場面を語るといふものである。これも『源氏』取りの「実態を伝える叙述と看取されようが、問題は浮舟の「かたはら目」、「泪ぐみたるさま」、「泪のみ流れ出つゝ、我にもあらぬ様」を薫とともに、「哀」と観じていく書き手の立ち位置にある。

(II) たゞかの向かひに峰の松、嵐に鹿のね響き添へたるほど、すこく聞ゝわたされて、もの悲しきに、眺むる庭の草むらは、露のみ玉かと磨きつゝ、すみ行月は、秋を憂れへ顔なる虫の声など、取り集め哀を尽したる所の様なるに、(四三六頁)

叙上は、浮舟苦悩の姿が描かれている場面である。注意したいのはこの場面に散りばめられた歌語である。その他の箇所にも、このテキストでは歌語、和歌世界に流通する言表が多く散見されるなか、もの思いに「眺める」浮舟の叙

述に定型的な歌語、和歌世界の発想法が確認できる。ここでは、「峰の松」「嵐に鹿のね」「すみ行く月」などがそれであるが、こうした歌語は、和歌世界において「山家」の「あはれ」をいう素材である。和歌世界に流通する言表を用いつつ、物語世界の「里」の「あはれ」を構築するテキストの書き手。この立ち位置が、和歌世界にあることは疑いないことだ。問題は、この書き手の立ち位置とおぼしい中世和歌世界において、こうした山「里」、「月」という素材の組み合わせが、男を待つ「女」の姿とともに和歌に見られることである。

(12) まつ人の山路の月もとほければ里の名つらきかたしきのとこ(藤原定家『拾遺愚草下』「恋」二五五四)

「峰の松、鹿のねひゞく」山「里」で、「月」をながめ、物思いに沈む「女」の姿。こうした「女」の姿を「あはれ」と描き出し、観じる書き手は、月をながめ男を待つ女の「あはれ」を創造(＝想像)する中世和歌世界の「はかなげな女」像を経由してのものであろう。つまり、中世和歌世界に流通する「女」表象を主体化し、「はかなげな女」＝「浮舟」語りに援用していたわけである。『徒然草』の「王朝物語」への対し方にかんして、中世和歌世界(＝「新古今」)での「王朝物語」像に一体化したため、『源氏物語』に存する「色好み」言説への批評性が見えないことは明らかにされていることである。当テキストの浮舟語りもそうした位相にあつたのではないか。それは、悩める「女」の周囲に、「あはれ」なる山「里」の雰囲気醸成する歌語を書き込み、悩める「女」の仕草に没入し「あはれ」と観じる書き手から明らかであろう。

「はかなげな女の悲恋の物語」、「山路の露」の言述は以上の通り。ここでは、中世和歌世界に流通する「女」表象を経由した書き手によって、「眺める」「女」浮舟の苦悩の姿が、「あはれ」なる「女」を興じる位相に回収され、「あはれ」なるものとして一元的に意味づけられていくのである。

【四】 終わりに

本稿では、「女」の苦悩の描かれ方を中心に、『源氏物語』以降の諸テキストの「色好み」言説への対し方を明らかにしてきた。このように、後代「物語文学」に分けると、単線的な「王朝物語」衰退史観では捉えきれない多様なテ

キストの相貌が浮かび上がる。ここでは、単に『源氏物語』を「模倣」し、「改作」するといったテキストのありようではなく、『源氏物語』などの諸テキストが切り開いた〈女〉へのまなざしを、引き継ぎ継承する一方、既有言説に再回収する、「あはれ」と興じる位相にスライドさせるなど、多様なテキストの様態、個と〈女〉表象への関わり方が窺えるのである。

●「依拠本文」『源氏物語』：小学館『完訳日本の古典』、『伊勢物語』、『大和物語』、『大鏡』：岩波『日本古典文学大系』、『夜の寝覚』：小学館『新編日本古典文学全集』、『風につれなき』：笠間書院『中世王朝物語全集』、『山路の露』：笠間書院『鎌倉時代物語集』、『三代実録』：吉川弘文館『増補国史大系』、『列女伝』：明治書院『新編漢文選 思想・歴史シリーズ』。岩波『新編国歌大観』。*引用に際して、適宜表記を改めた。

【注】

- (1) 鈴木弘道「今とりかえばやの改作手法について」付、とりかえばやの写本覚書（『日本文学五』所収、一九七六年五月、日本文学協会）
- (2) 鈴木一雄「後期物語文学の世界」（『日本古典文学全集』『夜の寝覚め』）解説、一九七四年十月三十日、小学館）
- (3) 小論『源氏物語』論—『源氏物語』と〈女〉言説との「対話」—（『国語教育研究』第四十七号、広島大学光葉会、未刊）
- (4) 『風につれなき』『風葉和歌集』（一二七—）によって明らかにされている。とすれば、こうした推測はつしまねばならないが、残欠部の物語展開を推測する材料として『風葉和歌集』の本物語に関わる箇所を眺めると、藤壺の女御を「風につれなきの嵯峨の入道后宮」と称し、同じく詠「風につれなき嵯峨の入道后宮」歌、「君が住むそなたの空を眺むれば雲も幾重のみ吉野の山」（『風葉和歌集』卷十八・雑三・一三七七）に「院、吉野山にこもらせ給ひて後、いづ方にかとおぼされて」と見える。

(5) 注(2)。

(6) 辛島正雄『中世王朝物語史論』上・下（上巻二〇〇一年五月三十一日・下巻

二〇〇一年九月十九日、笠間書院）

(7) 「解題」（笠間書院『鎌倉時代物語集成 第五巻』）

(8) 例えば以下のような和歌がある。「ひとりこそおもひいりにしおくやまにしかもなくなりみねのまつかぜ」（藤原良経『秋篠月清集下』、『雑部』一五一六）、「なにとなくすままほしくぞおもほゆる鹿あはれなる秋の山里」（西行法師『西行法師家集』、『山家鹿』二五七）、「身はかくてしぼしとおもふ山ざとにこころをかへす峰の松かぜ」（為兼『金玉歌合』、一一四）、「いづくとてあはれならずはなれども荒れたるやどぞ月はさびしき」（西行法師『山家心中集』、六五）

(9) 真部奈美『徒然草』と王朝 上（『problematique II 〈文学／教育〉』、二〇〇一年七月一日、同人problematique）

村山 太郎

A Thesis on “*Genjimonogatari*”—How to describe women in “*Monogatari Bungaku*” after “*Genjimonogatari*”.

Taro Murayama

The aims of this paper was to explain how to describe women in “*Monogatari Bungaku*” after “*Genjimonogatari*”.

Key words : “*Monogatari Bungaku*” after “*Genjimonogatari*”, Women, Discourse of “*Irogonomi*”
キーワード：『源氏物語』以降の「物語文学」、〈女〉、〈色好み〉言説。